

「第4回ユネスコスクール（ESD）神奈川県大会」

— SDGsに基づくESDと地球市民教育の対話に向けたユネスコスクールの地域連携 —

- 1 日時： 2018年12月15日（土）
- 2 会場： 玉川大学 大学教育棟2014 521教室
- 3 参加者数 約80名

<プログラム>

総合司会 小林亮

<開会式>

(1) 挨拶

（近藤洋子 玉川大学教育学部長）

・本学は2008年にユネスコスクールに加盟し、その後、UNIV ネットに加盟して活動している。Cop24が開かれ、地球的な課題が話し合われているが、ESD, 地球市民教育を通して持続可能な社会造りについて次世代の子どもたちに伝えていくことが大切になってくる。

（住田昌治 神奈川県 ASPnet 連絡協議会会長）

・全国大会のテーマが「未来は私たちが待っている」となっていたが、何もしなければ未来は待ってこないだろう。変容しなくてはならない。この集まりは通算すると6回目になる。県内の加盟校は少ないが、交流活動を始めようという声が上がって始まった。お互いに連携協力してゆくことが大切。これからもネットワークを広げていきたい。

(2) 祝辞

（池原充洋 ユネスコ国内委員会副事務総長）

・現在ユネスコスクールは182カ国、11000校以上が加盟しており、日本では1116校がESDの推進拠点として活動している。先の全国大会にはユネスコ本部からチェさん、ザビーネさんが出席、また、ユネスコスクールを見学し優れた活動が行われていることに感心していた。ESDがSDGsの実現のカギとなるので文科省としてもESDを推進していきたい。

（進藤由美 ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部長）

・全国大会と神奈川大会には地域連携という共通したテーマがみられる。ユネスコスクールの活動を進めるにあたっては地域との連携は大切なものになっている。ACCUは気候変動について各国のユネスコスクールと協働学習を行い、教職員の交流事業、ユネスコスクールアドバイザー事業も開始した。

<講演>

「ユネスコスクールにおける価値教育の課題と展望」（松浦晃一郎 第8代ユネスコ事務総長）

- ・平成の30年間で世界遺産、文化遺産などが有名になり、日本とユネスコの関係緊密化が進んだ。
- ・そうしたなかでもユネスコの中核事業は「教育」である。
- ・民間ユネスコ運動も数的にはインドも多いが、活動に関しては日本が世界をリードしてきた。
- ・自然科学の分野でも日本とユネスコの関係が深まってきている。
- ・当初、共同学校としてスタートしたユネスコスクールは2008年からユネスコアソシエイトスクールと

- なり、日本が中心になって「ESDの10年」の中核的实施主体となって活動してきている。
- ・80年代後半に生まれた「SD」は1992年の地球サミットでは主要テーマになった。
 - ・その後、2015年まで継続した「MDG」、そして現在では「SDGs」が達成すべき目標となっている。
しかし、日本の達成率は現在156カ国中、14位で特に目標5、12、13、14、17の分野ではまだまだの状態である。
 - ・UNIV ネットができ、大学と高中小の縦の連携ができ、学生と社会人の交流（ユネスコ協会との連携）もできてきている。
 - ・SDGsは社会全体で取り組み、GCEDは個人のレベルで取り組んで行ける。
 - ・SDGs、ESDは学生時代に実践していくことが大切である。

<パネルディスカッション>

「ユネスコスクールにおけるESDと地球市民教育の対話と統合」 司会 小林亮

○ 各パネラーからの報告

(池上敦子 成蹊学園サステナビリティ教育研究センター長)

- ・成蹊学園の教育とESDの理念が人間性の尊重、多様性の尊重など同じようなかたちになっている。
様々な事象を通して自らが考え、判断できる環境を整えていきたい。

(住田昌治 横浜市立日枝小学校校長)

- ・子どもたちの日々の活動が持続可能な活動に繋がる。ESDは次期学習指導要領にも入っており、これからの子どもたちの自分自身の選択が持続可能な社会に繋がっていく。
- ・ESDの魅力は地域、学校、教師、教育、子どもたちの変容にある。

(松倉紗耶香 上尾市立東中学校研究主任)

- ・上尾市立東中学校は文科省から研究開発学校の指定を受けて「グローバルシチズンシップ」科を設け、持続可能な社会の担い手の育成を目指している。

(辰野まどか 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト代表理事)

- ・グローバルシチズンとは「地球志民」でもある。
- ・SDGs 4.7のプラットフォーム造りを進めている。

(松浦 前ユネスコ事務局長からのコメント)

○ SDGsを担う人材造りにあたって障害になっているものは何か教えてほしい。

- ・学校が画一的になり、壁が多い。排他的なものにならない用にすることが大事。(住田)
- ・外部の人間が学校に入り込みにくいところ。(辰野)
- ・今までやったことのないことをやることの壁がある。(松倉)
- ・新しい仕事への拒否反応。時間とお金の問題。(池上)

○ 日常の活動のなかで、SDGsで学んだことを実践していくことが大切。

○ 玉川大学からESDのモデルを行くって行ってほしい。

<神奈川県ユネスコスクール加盟各校からの活動報告>

- 横浜シュタイナー学園：暗示型 ESD 実践校。多文化交流の土台としてのコスモロジー形成に着目し、クラス劇や家造り卒業発表などを体験している。
- 横浜国立大学付属鎌倉中学校
地域学習として鎌倉を取り上げて学んでいる ビーチコーミングなどを行っている
- 湘南学園中学校高等学校
日中韓青年文化フェスティバルに参加 かのやチャレンジ ESD 入試の導入
- 東海大学教養学部
東海大 ESD ユースセミナー 今回は環境学習を実施した
- 横浜市立永田台小学校
地元の商店街などと交流 地域学習を進めた
- 神奈川県立有馬高校
地元にあるイスラム系インターナショナルスクールとの交流を始めた
- 横浜市立幸ヶ谷小学校
「桜の木の伐採」を取り上げてホールスクールアプローチのかたちで取り組んだ
- 玉川大学教育学部
全人教育のもと、地域ネットワークの構築や ESD 実践学習プログラムの開発などを実施
- 横浜市立市が尾中学校
小学校を訪問し ESD の学習を子どもたちに行った SDGs のカードを校舎内に掲示
- 横須賀市立横須賀総合高校
防災教育のためのビデオ教材を作成した 津波サミットへも参加

<ワークショップ：SDGs カードゲーム>

辰野まどか（一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト代表理事）

- 4～5名のグループに分かれてカードゲームを体験。社会開発のシミュレーションを行ったが最初
は全体的に経済開発が優勢だったが後半からは環境、社会開発に力が注がれるようになり、よりよい社
会造りの方向へと変化していった。

<閉会式>

(1) 講評

(渡辺一雄 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター参与)

- ・学生、生徒が登壇し ESD 活動に自分たちが実際にどう関わっているか発表したことが素晴らしかった。
- ・教える側の論理、教わる側の論理それぞれあるが、子どもがどう変わっていくかが大切。
- ・ESD とは学校教育に限定されない学校外教育でもある。

(2) 閉会のことば

(小原一仁 玉川大学教育学部副学部長)

- ・現在は国際社会といわれているが、課題が多い社会になっている。望ましい未来に社会を変えるものは何か、それは教育によって変容した児童生徒達によってなされる。

- ・ 神奈川大会宣言文の発表 （神奈川県ユネスコスクール連絡協議会事務局長 望月浩明）
別紙で配布された宣言文を紹介、参加者の拍手で採択された。
- ・ ユネスコスクールへのお誘い （東海大学 教養学部教授 小貫大輔）
別紙で配布された「ユネスコスクールへのお誘い」を紹介、ユネスコスクールの目的や参加のメリットなどを説明。

(以 上)